

農業と科学

昭和46年2月1日(毎月1日発行) 第172号
昭和31年10月5日 第3種郵便物認可

発行所 東京都千代田区有楽町1-12-1 日比谷三井ビル
チッソ旭肥料株式会社

編集兼発行人：伊藤和夫
定価：1部10円

農業と科学

1971

2

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD



農家と農業経営

農業技術研究所経営第一科長

児玉賀典

1. 農家の動向

70年センサスの結果が昨年の10月1日に農林省より公表された。それをみると、筆者の認識不足にもよるが、意外な数字が現れている。すなわち総農家戸数は534.2万戸である。農家戸数は意外なほど減少していないということである。これほど農業が激動しているのに、明治以来の農家戸数500万戸という数字が残っているのである。

しかし一方、専業農家戸数は83.2万戸、65年中間センサスのとき総農家戸数の21.5%であった専業農家率は15.6%と大幅に減退している。第2種兼業農家戸数は41.8%から50.7%へ、これは大幅に増加している。

農家といわれるものの15.6%しか、農業だけで食っていない。半分以上が、他の収入をあてにして生きているという事実をみるのである。

専業農家83.2万戸が、すべて実質的に農業で安定的に食っているかという点、必しもそうはいえない。養鶏、養豚、施設園芸といった作目の経営もあるから、一概にいえないが、土地面積に着目して、2ha以上の専業農家戸数をみると、30.1万戸である。また別の視点から、自立経営と称するものの下限を、昭和43年度は118万円の農業所得額にしているが、その戸数比率は総農家戸数の9.9%といわれている。概算であるが、約50万戸といえるであろう。

2. "農家概念"と"農業経営概念"の峻別 (70年代の農業経営の性格)

上述のようにみえてくると、農業政策が、そのふところの中に収容すべき農家は500万戸であるが農業経営体として、経営改善の対象とする戸数は50万戸、それを如何にして拡充、増加するか—という問題になるように思う。極言すれば、"農家概念"と"農業経営概念"を峻別してかかるべき時代になってきたということではなかろうか。

問題をもう少しつっ込んでみよう。

最近1年ほどの間、われわれは"70年代の農業のあり方"という言葉が随分と聞かされてきた。それは、それぞれ専門とする分野の違いによって、各種各様である。農業経営論の立場からいうならば、次のように言ひうるのではなかろうか。

60年代の農業経営の性格は、経済生長の途上において国民所得は上昇しつつ、人口の都市への集中によって、遂に農業人口は総人口の4分の1に減少したが、食糧需要の量的、質的增加、相対的不足の条件下での経営であったといえる。

その条件下では、伝統的な物別生産政策のもとで農畜産物価格を上昇方向にスライドさせつつ、生産に刺戟を与えてゆけば、農業所得は上昇するから、基本的矛盾はなくて済んだ。

ただ、労働力の流出が古い生産方法に止まるかぎり、農業労賃の高騰と相待って、多数の兼業農家を排出する一方の要因にもなった。だがしかし、労働力不足、労賃高騰が、機械による労力技術を新しい農法として定着せしめる強い起因でもあった。わが国の農業経営において、始めて労働生産性という認識が浸透した効果も評価されてよい。ところが、60年代も後期になって農業所得の上昇、それによる固定資本投資の増大に問題が生れてきた。すなわち、労働生産性は上昇したが、経営の収益性が、資本生産性の側面から制約を強めてきたわけである。かくして、生産政策は効果を発揮したが、農畜産物の過剰現象を矛盾として内包しながら70年代を迎えることになった。

農畜産物の不足条件と過剰条件では、経営問題は全く、表と裏の相違がある。生産量を増加したからといって、農業所得が増大する保証はないからだ。当然のこととして、増産政策は生産調整政策に変わったし、価格政策も方向を変えつつある。

何故かという点、消費人口1億をもち、GNP自由世界第2位という国は、他の農業諸国にとって、好個の食糧市場として映るのが、至極当然の心配の種になるからである。

食糧の国境防衛の問題は、農業政策にまかせるとして、経営としては何があるのか、極めて常軌的ないい方であるが、それは農畜産物の生産コストの低減による国際競争への抵抗であろう。

経済理論的には、生産コストの低減は、生産諸要素のコストをそれぞれ低下させることと、一方

生産量を増加することによって実現されるといわれている。本当にそうであろうか？

抽象的な生産コスト低減論はそれでよいかも知れないが、現実的にみれば、生産という行為は、個々の経営で行はれるのであるから、個々の経営が生産コストを下げないことには下らない。そして重要なことは、生産コスト管理ができる経営主の能力と、それを可能にする経営の「からだ」があって、始めてできるのだということである。

わが国の伝統的な「農家」概念ではもはやそれはできない。「農業経営」概念を峻別して、経営政策を確立するときではないだろうか。

3. 農業所得と生産費

60年代の農業経営と70年代のそれとの性格を述べてきたが、その差異は、経営目標の質的变化として考えてみる必要がある。農家という概念のもとでは、農家の経済的目標は農家所得の持続的拡大である。すなわち、農業による所得とその他の所得とで生計が成立し、農業が継続できればよい兼業の方が割がよければ、兼業収入で補って、一向に差支えないわけだ。しかし、専業農家であるからには、農業所得の持続的拡大が必要であるし労働力不足、労賃高騰の条件下では、働く以上は1日当り労働所得ををらみ合せて農業所得を意識すればよい。農業所得というのは説明するまでもないが、今後の敘述と関係するので、あえて述べると、農業粗生産額から経営費を差引いたものである。農業経営費は肥料代や農薬代、購入飼料費など物財費と支払労賃、支払地代と支払利子を含み、**厳密**には固定資本の償却費を含んだものである。だから逆に、農業所得には、自家労賃分、自作地代分、および自己資本利子を含み、**厳密**には利潤があれば利潤を含んでいるといってもよい。

ところが、70年代の経営目標に加味される農畜産物の生産費は、経営費と異なる。生産費は、農畜産物単位当りにかかったすべての費用が含まれる。自家労力、自作地、自己資本といった自己所有にかかわるものの用役を、すべて費用として含むわけである。

農産物の価格が自由競争の結果下落しても、ぎりぎり堪えうる、生産をやる意味の限界として規準になるものである。

4. む す び

経営活動のあり方と、あらせ方

上述の意味での生産費の低減が、国際競争という命題のもとに達成できるかどうか、これが、70年代の農業経営問題の中心であるが、そのための諸問題については、号を追って他の筆者に述べていただこうと思う。

重ねて云うが、生産費のある水準への低減は、経営活動の結果であって、当初から決められるものではない。だから、経営活動のあり方、あらせ方が問題である。すなわち、如何に努力してみても、経営規模の一定水準をもたぬかぎり、経営活動の成果は知れている。

仮に、60年代に考えたような一定水準の農業所得が実現しても、高い生産費がかかっているれば、その農畜産物は、コスト割れでしか売れないかもしれないし、コスト割れでも、農業所得があれば……という考え方で継続すれば、農畜産物の価格を自ら下落せしめることになるだろう。

経営規模の拡大、拡大され、近代化されるであろう経営体を運営する人とその考え方、拡大された規模に対応する機械化、省力化技術、生産組織、それが過大投資にならぬような資本投下の手順、さらに、作られた商品と、その生産物のマーケティングのあり方、等を考えてみたいと思う。

目 次

- ・ 農家と農業経営…………… (2)
農業技術研究所経営第一科長 児玉賀典
- ・ 宮崎県の施設園芸と特徴…………… (4)
宮崎大学農学部 五味 清
- ・ 北陸のそ菜と燐硝安加里…………… (7)
福井県農業試験場そ菜課 森 義夫
- ・ 近代的装備でのびる千倉町のきゅうり (11)
千葉県安房農業改良普及所丸山支所 山崎龍男
- 今月の焦点……米価と物統令…………… (10)
- 転作予定面積は？…………… (6)
- 昭和50年には、どうなる…………… (9)
- ・ 農業朝日賞に輝やく『ひるぜん大根、
と燐硝安加里…………… (13)
河見泰成

宮崎県の

施設園芸と特徴

宮崎大学農学部

五味 清

はじめに

宮崎県の沿海地帯は表1, 図1に示したようにえんえん 350 kmにわたり年平均気温 16.7℃以上の温暖地であり, 特に冬季の温暖, 多日照, 快晴日数の多い気候条件に恵まれて, 古くから早出し野菜の特産地として全国に名声を博してきた。

また耕地にも恵まれ, 沿海地帯の田畑面積は4万ha, うち水田面積は全県の59%を占め, 天恵の気候条件と相まって, 水田裏作を主体とした施設園芸の母体となっている。

すなわち, 宮崎県における昭和44年度の施設野菜面積1560haのうち93%が, 宮崎市を中心とした沿海地帯に分布し特徴あるハウス団地を形成している。

1. 生産の動向

県下のハウス栽培面積は, 昭和40年以降急速な

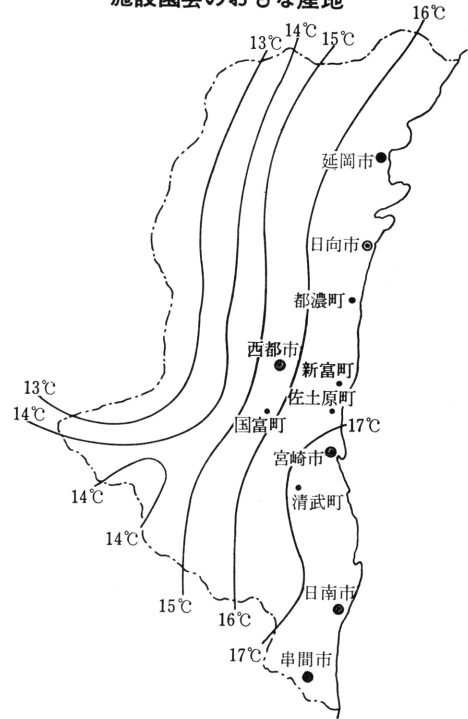
第1表 宮崎、高知の冬季気候条件

項目	地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
快晴日数	宮崎	13	10	9	10	6					8	11	14
	高知	10	7	10	7	5					9	10	12
冬季日照時間	宮崎	191	174	190								188	2,254
	高知	190	179	204								188	2,284
冬季平均気温	宮崎	6.7	7.6	10.7								9.0	16.7
	高知	5.0	7.0	9.2								7.5	15.6

伸展を示しており, 昭和44年度の実績ではカボチャ(半促成, 抑制) 865ha, キュウリ(促成, ハウス抑制) 388ha, トマト(促成) 107ha, ピーマン(促成) 33haであり, その他にプリンスメロン, ハウススイカが若干含まれている。

宮崎県における特産野菜としてカボチャ, キュウリ, トマト, スイカ, ピーマン, 露地メロン, サトイモ, 食用カンショ, 秋パレイショ, エンドウ, ダイコン切干, ナスの12品目の県外出荷量, 販売金額を年次別に見ると図3のとおりで, 昭和

図1 宮崎県における全年平均気温と施設園芸のおもな産地



44年度には6.7万トン, 63億円に達し, 今後ますます躍進するすう勢にある。

宮崎県では国の総合農政の展開に先立ち, 数年前から, 農政の基本方針として稲作をベースに, 畜産, 野菜, 果樹を基幹作目とした, 積極的な営農振興方式を推進しており, 野菜については, 沿海地帯の施設園芸の集団産地化と規模拡大を最重要項目にあげ, 種々の施策を進めている。

また従来は大消費市場に遠いため, 輸送問題が一つのあい路となっていたが, 本年3月には細島一川崎間, 11月には細島一神戸間に, 6千トン級

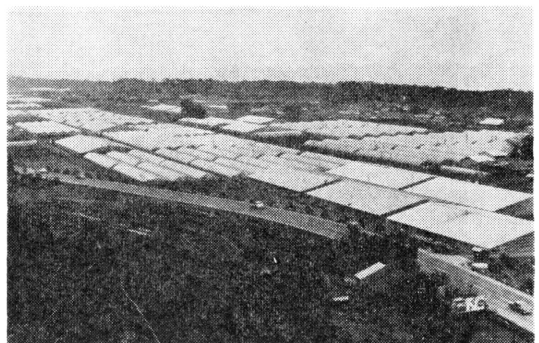


図2 構造改善事業によるハウスの集団産地 (新富町 大持田地区)

のカーフェリーが就航することに
なり、これを機会に農畜産物の海上輸送が実現する。

フェリー1便の農産物輸送能力は310トンで、野菜のフェリー輸送体制の確立をはかるため、昭和51年度を目標に、年次的にフェリーに直結する大型集団産地6カ所の造成に着手し、ハウス面積新規200ha、既成拡大410ha計610haの拡大を見込み灌水、加温等の近代化施設を合せて67億円を投ずる計画である。これにより県外出荷量は、昭和43年度の3.5倍約23万トンに達する予定である。

現在の出荷先は、出荷経費の安い京阪神、中国北九州市場が主体であり、北九州、中国約30%、京阪神25%、中京、京浜5~6%程度となっているが、フェリー輸送の実現により、京浜市場への出荷がかなり増加するものと考えられる。

現在の出荷先は、出荷経費の安い京阪神、中国北九州市場が主体であり、北九州、中国約30%、京阪神25%、中京、京浜5~6%程度となっているが、フェリー輸送の実現により、京浜市場への出荷がかなり増加するものと考えられる。

2. ハウスの規格と設備

油障子利用の框栽培から始まった宮崎の早出し野菜も、ビニールトンネル、竹幌型ハウスから鉄骨連棟ハウスに発展し、さらにマンモスハウスも見られるようになった。

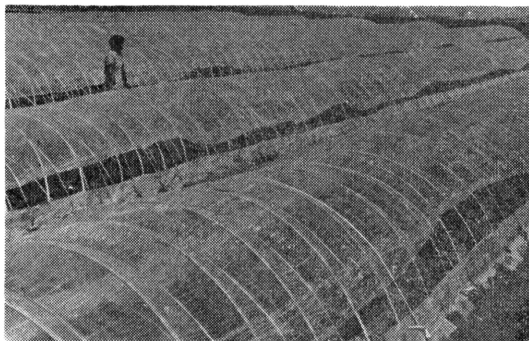
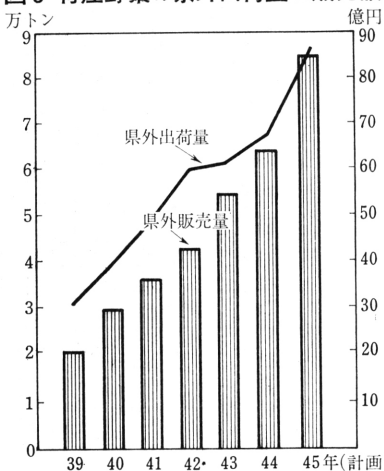


図4 クミアイ1号型鉄骨ハウスによる
キュウリ促成栽培 (宮崎市生目地区)



昭和44年のハウス面積3539,000m²のうち鉄骨ハウスは約1505,000m²、パイプハウス270,000m²であり、鉄骨50%、パイプ3.6%、マンモスハウス7%となっている。

今後の傾向としては、鉄骨ハウスとともにパイプハウスの伸びが注目され、一部では中柱に鉄骨を使った折衷式のパイプハウス(APハウス、HPハウスなど)も、かなり普及するものと考えられる。なお県では昭和42年クミアイ標準型の鉄骨ハウスを設定し、全県下に広く普及している。クミアイ1号型は間口16.4m(4連棟)のキュウリ用であり、クミアイ2号型は間口16.8m(3連棟)のトマト用、クミアイ3号型は間口16m屋根型単棟のマンモスハウスで、ピーマン用となっており一棟1,700m²の大型マンモスハウスもある。

またパイプハウスも間口16.4m(4連棟)のものを1号型、間口16.8m(3連棟)のものを2号型として普及している。特に昭和40年以降、施設の近代化として自動灌水施設・温風暖房による加温機の普及をはかり、加温面積はキュウリ60%、トマト28%、ピーマン80%程度と推定され、省力化と規模拡大に役立っており、灌水施設も70%を超えている。なお昭和41年には県内8産地がキュウリ、トマトの指定産地となり、新たに昭和45年には2産地がピーマンの指定産地となった。これらの指定産地ではキュウリを中心に、モミガラクタン利用の共同育苗を普及し、技術の平準化と収量の増大、および品質の向上をはかりながら、共販体制を強く推進している。

3. 作型の分化

本県の施設園芸は、一部海岸砂丘地帯を除いて大部分が水田裏作であり、「野菜+米」、「米+



図5 ビニールトンネルによるカボチャ半促成栽培
(宮崎市富吉地区)

野菜」といった複合経営が主体となっている。したがって、水稻の作型の分化に伴って施設野菜の作型も分化してきた。現在の主な作型を種類別に示したのが図6である。

たとえばキュウリの促成栽培は、中期水稻との組み合わせで、10月上中旬に播種され温風暖房機の導入により栽培が増加しており、トマトの促成は早期水稻との組み合わせで

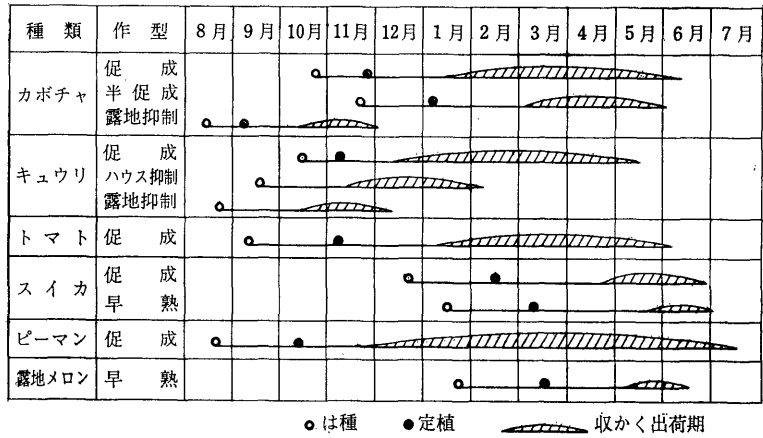
9月上旬に播種され、カボチャの促成半促成は、普通水稻の跡作として、それぞれ10月中下旬、11月下旬に播種される。

また、早期水稻の普及にともない抑制果菜の栽培が増加し、輪栽の面で安定した生産体系が組立てられており、露地抑制キュウリは8月下旬、ハウス抑制キュウリは9月中旬、露地抑制カボチャは8月中旬に播種される。

ハウス抑制キュウリは、水田では跡作にカボチャを導入する2作型が、また畑地帯では、スイカを作付する2作型が分化し、生産量、収益性ともに安定してきた。

これらの作型に使用される主要品種は、カボチャが宮崎早生1号、キュウリが促成、久留米落合

図6 宮崎県における主要野菜の作型



H型、抑制、長日落合2号、トマトは強力五光および東光、スイカが天竜2号、こだま、ピーマンがさががけみどりとなっている。

おわりに

以上のように、宮崎県における施設園芸は、沿海地帯の水田裏作を主体として多彩な作型を形成しており、今後ますます発展するものと考えられるが、そのためには、農家の生産意欲の向上と生産施設の近代化、技術の改善などによる経営規模の拡大とともに、集団産地の育成、生産組織の強化、共販体制の確立などきめ細かい施策が必要であって、今後一層の奮起が望まれる。

転作予定面積は？

～ 作物別、年次別の動向 ～

ことしも、米の作付調整がきびしく進められるが、農林省では、作物別に、年次別に、どの程度の面積の転作を予定しているのだろうか？この線にそってまとめられたのが別表である。

なお、46年度の転作面積15万haは、46年度

の新規転作面積9万7千haに、45年度の転作面積を加えたものである。(ただし、数字は概数を示したものであるから、内訳の計は、必ずしも総計と一致しない。

また、各転作作物の収益性については、9頁に掲載した。

作物別、年次別転作予定面積 (千ha)

区 分	46年	47年	48年	49年	50年
飼料作物	30	34	37	40	44
永年性作物	6	6	6	6	6
大豆等豆類	45	34	34	34	34
野 菜	10	10	10	10	9
そ の 他	6	6	6	6	6
計	97	89	92	95	99
累 計	150.	239	331	426	525

北陸のそ菜と

燐硝安加里

福井県農業試験場そ菜課

森 義 夫

はじめに

北陸の耕地は大部分が水田と砂丘地で、そ菜の栽培も水田の裏作と転作、および砂丘地の利用が中心をなしている。

とくに最近、米の生産調整ともからんで、水田転作のそ菜栽培が増える傾向がみられる。

水田では高畦栽培がなされるためか、畑地に比べて肥料の流亡が激しく、砂丘地もまた肥料が流亡し易い代表的土性である。

このような肥料の流亡を起し易い北陸のそ菜には、燐硝安加里のような硝酸系肥料は適しないだろうというのが我々の常識であった。

ところが、窒素の形態や肥料の種類の試験をしているうちに、そのような考えは間違っていることが解った。

とくに水田裏作では、ポリエチレンのマルチング栽培をすることによって、他の形態の肥料よりもはるかに増収が得られた。以下、燐硝安加里に関する試験成果の概要を述べご参考に供したい。

1. 水田裏作そ菜に対する燐硝安加里の肥効

(1) ハクサイ・カンランと窒素形態

水田裏作のハクサイおよびカンランを対象に、窒素の形態に関する試験を行なった。

供試した肥料は、硫安、尿素(いずれも過石および塩加併用)、燐硝安加里である。

(第2表)カンランのマルチ栽培における窒素形態と肥効 (昭43、福井農試)

	総 重	結球重	外葉数	外葉重	球 径		10a当り 収 量	収量比
					たて	よこ		
硫 安	1940kg	1268g	6 枚	277 g	21cm	12cm	3371kg	100%
尿 素	1761	1442	6	221	20	11	3833	113.7
燐硝安加里	1845	1513	6	255	21	12	4025	119.4

品種 石井交配時無大御所、播種期 8月8日、定植期 9月6日、元肥全量施肥、黒ポリマルチ
施肥量 N 36.0kg P 18.6kg K 31.8kg (10アール当り)

施用法は全量元肥施用とし、流亡を防ぐため黒色ポリのマルチを行なった。その結果は第1表および第2表のとおりで、ハクサイ、カンランともに燐硝安加里が最もよく、次いで尿素、硫安の順で、ハクサイの畑作試験でも同一の傾向が得られた。

この試験結果から、従来流亡し易いといわれていた硝酸態窒素でも、ポリマルチを行うことによって流亡が防止され、かえってアンモニア態や尿素態の肥料よりも、高い肥効が得られることが解った。

とくに全量元肥栽培で10アール当たりハクサイ12,000kg、カンランで4,000kgの収量が得られたことは、燐硝安加里にポリマルチを併用することによって、全量元肥栽培も可能なことを示している。

(第1表) ハクサイのマルチ栽培における窒素形態と肥効 (昭43、福井農試)

	総 重	結球重	外葉数	外葉重	球 径		10a当り 収 量	収量比	
					たて	よこ			
水田裏作	硫 安	3447 ^g	2511 ^g	12.1 ^枚	823 ^g	19.9 ^{cm}	11.9 ^{cm}	10,004kg	100%
	尿 素	3405	2590	10.5	735	25.2	15.9	10,360	103
	燐硝安加里	3737	2958	13.0	452	22.0	16.0	11,832	118
畑作	硫 安	3588	2785	11.2	765	32.5	22.7	11,140	100
	尿 素	4247	2946	10.4	872	35.2	24.4	11,783	106
	燐硝安加里	4344	3253	12.1	851	34.1	18.2	13,012	117

品種 松島交配仲秋、播種期 8月5日、定植期 9月6日、元肥全量施肥、黒ポリマルチ
施肥量 N 30.4kg P 16.4kg K 26.8kg (10アール当り)

(2) 越冬そ菜(タマネギ)と燐硝安加里

北陸では長期且つ多量の降雪のため、どのような形態の窒素肥料も、裸地で冬期間の流亡を避けることはできない。

したがって、タマネギのように10~11月に定植して越冬栽培するそ菜の元肥は、定植後から12月までの肥効が重要であり、それ以後は窒素が土壌中に残っていても、流亡によって無駄になってしまう。つまり長期の残効性は必要でないが、定植

から12月までの低温期に、速効的に効いてほしいのが越冬そ菜の元肥である。

そのような考え方からタマネギを供試して、燐硝安加里の肥効を検討したのが第3表で、追肥の種類がどの肥料の場合においても、

磷硝安加里を元肥にしたものがよく、15%から18%の増収となっている。

また越冬そ菜の追肥は、融雪直後の肥効が重要といわれているが、低温期には、硝酸態窒素が吸収され易いのではないかと考えられる。

このような角度から、タマネギの追肥について検討したのが第4表である。その結果は10アール当たり収量、平均球重ともに磷硝安加リの追肥区がよく、とくに最も商品価値の高いL級規格が、標準区の4倍以上もとれるという好結果が得られた。

以上の結果から、タマネギのような越冬そ菜

(第4表) タマネギの追肥に対する磷硝安加リの肥効 (昭43、福井農試)

	規 格 別 収 量						10a当収量	収量比	平均球種
	LL	L	M	S	分球	計			
標準区	1875	1355	3475	2100	0	8805	3258	100	122
磷硝安加里	1200	5600	2600	2075	450	11425	4412	135	161

品種 淡路中高 播種期 8月28日 定植期 11月1日
施肥法 標準区はそ菜1号元肥、そ菜2号追肥、磷硝安加里区はそ菜1号元肥
磷硝安加里追肥 N30kg P24.8kg K26.4kg (10アール当り)

は、硝酸系化成肥料を元肥と追肥に分施するのが適当と考えられる。

(3) 越冬そ菜のポリマルチ栽培と磷硝安加里

越冬そ菜でもイチゴ、レタス、秋播カンランなどはポリマルチ栽培が可能である。ポリマルチ栽培では追肥が困難なところから、残効性の永い肥料が必要であり、肥料の種類について検討した結果、硝酸化成抑制肥料が最も有効であった。しかし硝酸化成抑制肥料は低温期の肥効が充分でない

(第3表) タマネギの元肥に対する肥料の種類 (昭43、福井農試)

元肥の種類	規 格 別 収 量					10a当収量	収量比	平均球重
	LL	L	M	S	計			
普通化成区	3070g	3855g	1660g	180g	8765g	2919kg	100%	147g
硝酸抑制化成区	3270	2200	2300	370	8140	2711	93	136
磷硝安加里区(1)	3190	4350	2170	405	10115	3368	115	139
磷硝安加里区(2)	3035	5665	1400	225	10325	3438	118	159

品種 淡路中高 播種期 8月28日 定植期 11月2日
施肥量 N30kg P25kg K26kg 元肥3割 追肥7割 追肥は4月9日施用

ので、磷硝安加里との併用を検討したのが第5表である。

この試験の結果では、硝酸化成抑制肥料1に対し、磷硝安加里2の割合で施用したものが最もよく、越冬そ菜のイチゴでも、全量元肥栽培を实用化できる見透しが得られた。

2. 砂丘地そ菜に対する磷硝安加リの肥効

砂丘地は通水性がよく、肥料が極めて流亡し易い土性である。したがって土壌中で流亡し易い硝酸態窒素は、砂丘地には不向きであろうと考

えられる。

ところが、ダイコンを用いて砂丘地における肥料の種類を検討した結果、磷硝安加里が最も有効であった。(第6表)

砂丘地で磷硝安加リの肥効が高い理由については、砂丘地における肥料流亡の実態、とくに地下への流亡と、空中への脱窒割合等を検討しなければならないが、硝酸系肥料は空中への脱窒が、少ないのではないかと考えられる。

(第5表) イチゴのポリマルチ栽培における硝酸化成抑制肥料と磷硝安加リの割合 (昭和44年)

施肥量(a当り)と 施肥割合	総 収 量		上物(8g以上)収量		a当たり 収 量	前 期 収 獲 率	大果(20g) 歩 合	施肥割合 収 量 比	施肥量 収 量 比
	果 数	果 重	前 期	全 期					
多肥 N 1.9kg	硝抑制1:磷硝1	248	2,008 ^g	990 ^g	1,536 ^g	191kg	59%	10%	100
	" 1: " 2	279	2,178	1,084	1,587	207	69	13	108
	" 1: " 3	266	2,130	1,001	1,600	203	61	14	106
中肥 N 1.3kg	" 1: " 1	223	1,854	959	1,455	177	66	15	100
	" 1: " 2	268	2,111	1,001	1,545	201	65	11	114
	" 1: " 3	266	1,972	920	1,447	188	64	9	106
少肥 N 0.6kg	" 1: " 1	270	2,006	1,062	1,450	191	72	5	100
	" 1: " 2	271	2,155	1,109	1,558	205	71	8	107
	" 1: " 3	238	2,079	1,171	1,582	198	73	9	104

品種 グナー 定植期 10月16日 栽植密度 1.4m(2条)×25cm

すなわち砂丘地は、塩基置換容量がほとんどないため、下層への流亡は肥料の種類間に差が少なく、空中への脱窒の少ない燐硝安加里の肥効が高くなったものと思われる。

また砂丘土壌は緩しう作用が少ないため、アンモニア系肥料を一時に多量施用した場合、アンモニアの障害が出るのではないか？という点についても検討を要しよう。

3. むすび

以上、北陸におけるそ菜栽培の大部分を占める水田作そ菜と砂丘地そ菜について、燐硝安加里施用試験の結果を述べたが、いずれも常識的には、燐硝安加里が不向きと考えられる土壌でありなが

ら、他の窒素形態の肥料や緩効性肥料よりも、はるかに高い肥効をあげており、燐硝安加里は、北陸のそ菜用肥料としても極めて適切な肥料と考えられる。

(第6表) 砂丘地のダイコンに対する肥料の種類 (昭45、福井農試)

項目 処理	総重	根重	根長	根径	上物歩合(本数)			a当り収量 (重量)
					根重 (400g)	根長 (30cm)	岐根率	
油 粕	640 g	398 g	34.6 cm	4.9 cm	49%	54%	32%	265.1 kg
鶏 糞	621	403	37.1	4.7	49	58	21	268.4
I B 化成	748	451	39.2	5.0	65	77	10	300.4
C D U 化成	790	482	42.0	5.1	75	79	5	321.0
A M 化成	735	425	38.4	5.0	63	71	13	283.1
燐硝安加里	841	526	42.4	5.2	82	75	10	350.3

品種 花知らず時無 播種期 4月15日 施肥法 元肥全量施肥 N32kg、P20kg、K28kg

昭和50年には、どうなる？

米を生産調整して、できるだけ転換しろという。しかし、昔から米ものは相談、ということが云われている。一体、転換作物の採算見通しはどのようなのか、これが問題だ。そこで

① 44年の数字は、農林省統計調査部「44年生産費調査」による。

② 50年の数字は、各作物とも価格を据置き、生産高、規模、資本装備について高度化されるとした場合。

③ また飼料作物については、生草価格を1kg当り3.5円と推定して試算。

という、3つの条件から割り出した各転換作物の昭和44年と50年の収益性をみると、大体次のようになると思われる。

① 大豆

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	159	250
所得 (円)	6,134	9,659
1日当り労働報酬(円)	1,227	1,462

・50年の経営規模は3ha、小型機械体系

② てん菜

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	3,924	4,000
所得 (円)	11,901	14,101
1日当り労働報酬(円)	1,610	2,608

・50年の経営規模は20ha、大型機械体系

③ 桑園

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	100(上繭)	100
所得 (円)	60,048	58,989
1日当り労働報酬(円)	1,246	2,080

・50年の経営規模は1ha、小型機械体系

④ 飼料作物

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	5,274	6,000
所得 (円)	9,422	11,515
1日当り労働報酬(円)	1,376	2,776

・50年の経営規模は20ha、大型機械体系

⑤ 麦(小麦, ビール麦)

	44年	50年
10 a 当り小麦	297	250
収量(kg) ビール麦	312	300
所得 (円)	8,472	5,360
1日当り労働報酬(円)	899	3,840

・50年の経営規模は20ha、大型機械体系

なお、44年の農林省統計調査部の「44年生産費調査」による米のデータは次のとおりである。

10 a 当り収量	484 kg
所得	44,539円
1日当り労働報酬	2,441円



米価と物統令

米の小売価格に対する物価統制令の適用廃止が、昨年末の46年度予算案編成の最終段階で、ヒョウタンからコマのような形で飛び出してきた。

生き馬の目を抜くジャーナリズムも、一時はハト豆の風さえあった。いったいこれでどうなるのか、とっさの判断がうまくできなかったからである。それでもとにかく判断を下さねばならない。ということで、無難に、競争条件を整備しなければ値上がりの恐れがあるという判断があった。

しかし、その他に、単純に値上がりするとばかりはいえないという、うがった見方もあった。その見方によると、現実がすでに値上がり状態になっているのだから、こんどの措置は現状追認にすぎないというわけである。いままで押えていたものがとり払われるのだから、上がるのは当たり前かもしれない。最高価格を規制するのが物統令だといっても、そもそもこれは21年3月、物価を抑制するためにつくられたもので、最高価格といっても、それ以下になるということにはなかった。

しかし、経済は法制の想定したようには動かない。たいていは法制のカベを破るような形で動いていく。米の小売価格もそうだ。配給価格は10キロ当たり1,520円（大都市）である。しかし多くの米屋はおよそ3段階の格差をつけている。上、中、並み米というところだ。並み米というのは普通の配給米で1,520円の米である。中米というのは配給米として政府→卸からきた米のうち、ややましなもので、値段は1,700円前後か。上米というのは自主流通米とかスシ米とかいわれる最良の品質の米である。上、中とも、物統令をきちんと守るということなら、1,520円で売っていなければならないものである。

このように現実には小売米価はもう上がってしまっているのが実態である。しかもその割合は相当に多く、家計調査などでは配給米以上のものが4割にも及んでいる。上がるとすれば、その割合が多少上がる程度であろう。物統令自体すでにあってない状態になっているのである。小売店にす

ればまたそうせざるをえない事情にある。というのも小売マージンというのは小売価格の7.0%程度しかない。いまのようなインフレのなかで、価格を押えられていたらとてもくえない。そこで、数年前、「特選米」というバカげた制度（というのは、これには玄米検査の1,2等米をあてるというわけだが、そのことと、うまい、まずいとは関係がない）がつくられたとき、それに便乗して少しましなものはみな、特選米にしてしまい、しかも、その制度が終わってからも、米屋と消費者だけはそれを正直に守ってきた。だからいまでも末端では特選米が生きた亡霊としてのさばっている。そしてその名のもとに格上げ（上、中米化）が行なわれたのである。税務署にしてからがすでにその現実を認めて、マージン率を13~15%にして査定している。知らぬはホトケばかりなりである。そういう構造の中で物統令がはずされたときどうなるか。一つ考えられることは、別にいまと変わらず、段階も、それぞれの割合も現在とほぼ同じ状態でいくということ。もう一つは割合として上、中物の割がふえていくということ。あと一つは、ササニシキ、コシヒカリという超一級米が特別の値段になって、かなり上がるという方向である。しかしここで考えねばならないことは、品質のいいが高く、そうでないものが相対的に安いというとき、それをしも「値上がり」といっていかということである。しかも米に限っていえば米代は家計費の平均でも3.4%しかなく、米よりは肉、野菜の方に余計にカネを払っているのである。残る問題は次の二つである。一つは小売業者は「混米されたものこそ味がよくなる」というがいくらいい米をつくっても、それが生産にまでハネ返らなければ、生産意欲は起きない。コシヒカリはコシヒカリとして、産地で包装し、消費でも純粹のコシヒカリとして売るようにすべきではないか、ということ。もう一つは、小売店の人手不足、包装、精米機の技術革新によって、大規模精米工場ができ、プリパッケージされた、混米による標準米が地方では大量に出回ってきている。これは特に味はよくなるかもしれない。が、物統令を廃止するには、その前に任意に混米ができる大規模集中精米工場を普及させ、プリパッケージしたポリ袋による販売を考えることが重要ではないだろうか。（S）

近代的装備で伸びる

千倉町のきゅうり

千葉県安房農業改良普及所
丸山支所

山 崎 龍 男

はじめに

千倉町は、東京湾をはさんで三浦半島と対する房総半島の最南端、茫洋たる大平洋に臨み、温暖な気候に恵まれ、京浜市場にも近く、非常に野菜作りに恵まれた環境に位置しています。古くから郡内消費地を対象に、野菜作りはさかんでしたが、時代の動きを敏感に感じとった人達8人で、昭和29年に園芸組合をつくり、東京市場出荷にふみ切ったのが始まりで、それ以来一貫して、きゅうり産地化の努力をつづけてきました。

最近では全国第一の規模を誇る共同育苗センター、自動選果包装機をとり入れた集選果場、安値対策として塩蔵加工施設など、生産、販売両面にわたり立派な近代化施設が相次いででき上っている。

これらの施設を産地の中軸とした、新しい態勢で飛躍を目指すこの産地の概要を紹介します。

≡ 強固な団結 ≡ 農事組合法人千倉園芸組合

強固な産地になるには、何より組織づくりからです。生産者組織として、昭和41年に従来の任意組合を法人組織とし、がっちり生産体制を固め、販売面は農協にまかせて、生産者は生産一本に打ち込める体制をとっています。

普及所で最近まとめた産地調査をみますと、次のとおりです。

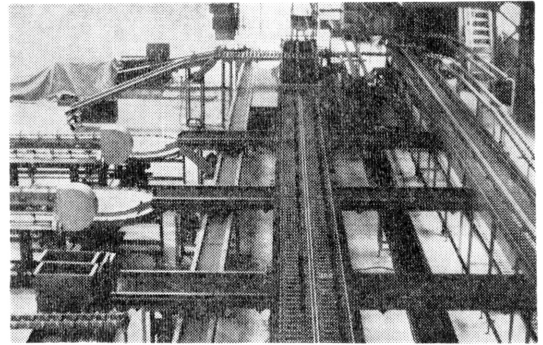
ハウス農家数 64戸

・ 面積 106,700㎡(1戸当り1,590㎡)

経営主の平均年齢 45才 家族労働力 2.6人

(第1表) 千倉そさい園芸組合の施設概要

事業内容	施設名	共同育苗センター	塩蔵加工施設	直営ハウス	集選果場
とり上げた事業名	野菜近代化事業	農業構造改善事業	野菜近代化事業	農業構造改善事業	
実施年度	昭和41～43年度	昭和44年度	昭和44年度	昭和43年度	
事業費	39,011千円	28,647千円	10,518千円	34,072千円	
規模	10,000㎡	927㎡	6,600㎡	910㎡(建坪)	
能力	育苗可能本数 30万本	処理能力 1,000t	年2回作	時間当り処理能力 3t	



巨大な集・選果場の内部

経営耕地面積 水田38アール 畑48アール

(殆んど露地やさい)

また園芸組合で運営する近代化施設と、集選果場〔事業主体は千倉農協〕の概要は第1表のとおりです。

以上の基盤にたって今後の方向を考えてみると、第一にこれらの施設の規模は、将来の産地発展を予測してつくられています。直営ハウスのほかは、すべて広い敷地内に一カ所にまとめられ、見るものをして目を見張らせるに十分なものですが、一方、生産農家をみた場合、ハウス農家数も意外に少なく、一戸当りの規模にもかなり差があり、1,000㎡以下の小規模農家もかなり多い。

規模拡大とハウス農家の増加によって、施設を駆使することが当面の課題とされます。

栽培のあらまし

作型、品種 春作、秋作の年2作のハウス利用になっています。かって43年から44年にかけて、暖地の利点をいかして、厳寒時の1～3月の高値

(第2表) 作 型

項目	品 種	播 種	定 植	収 かく	目標収量 (3.3㎡)
春 作	久留米落合H型	9月10日	10月10日	11月中旬～ 2月上旬	15 kg
秋 作	ときわひかり3号	1月15日	2月20日	3月下旬～ 7月下旬	35 kg

時を中心に11月中旬から6月まで出荷する、越冬長期採り年一作型も試みられましたが、かなり無理な面があって、予期した程の収益が上らず、危険分散をも考慮して現在第2表のような作型です。

育苗 育苗は前述の育苗セン

ターで、燻炭利用の水耕育苗方式で健苗を育成し組合員に配布します。育苗管理の作業は、役員の責任管理のもとに、生産者と切りはなして、専属に雇用された作業員があたりますが、種まきや接木作業のように、一時に多くの労力を必要とする作業には、苗の注文本数に応じて出役が義務づけられ、適期作業が行なわれる仕組みになっています。

このようにして生産された苗代金は、育苗に要した直接経費（種子、肥料、農薬、燃料、人件費等）と、施設の償却費（苗跡は栽培に利用されるので、育苗に要した期間計算）の合計額を、育苗本数で割り出して算出します。

最近の例では秋作苗は17円、春作苗は暖房費が加わって22円で配付されています。

定植と施肥 苗の配付予定日を基準に、組合員は、それぞれハウス内の定植準備をすすめます。

きゅうりはご承知のように、連作地でもつる割れ病は接木で回避できますが、残る問題はネマトーダの害と土壌の濃度障害です。

ネマトーダは春作終了後、必ず殺線虫剤の灌注をして被害を防ぎます。濃度障害については前作終了後、普及所で電導度計で測定し、その結果をもとに施肥量の加減や、場合によって除塩処置を講ずるなど対策をたてます。

肥料は42年までは、油粕を主体にした施肥設計にもとづいて、農協で配合したものを使っていましたが、施肥後、定植までかなりの日数（20日以上）をおかねばならず、そのうえ肥料代が高つくこと、また当時油粕の入手難から、これに代る肥料の要望が強まり、組合研究部で行った試験展示の成績等をもとに、この年からCDUの施用に踏みきりました。幸い結果は非常に良く、以来連続してこれを使っています。

参考までに施肥設計を第3表に示します。

(第3表) 施肥設計 330m² (100坪) 当り

肥料名	全量	備 考	配合肥料の割合(1袋40kg入り当り)		
			硫 安	7 kg	成 分
堆 肥	1,000kg	全量元肥とし生育後半状態により液肥を施用する	CDU単体	9	N. 10.65%
CDU配合	200		過 石	9	
苦土石灰	60		重 焼 燐	7	P. 9.80
ハイグリン	20		硫 加	8	
成分量	N. 21.3kg P. 19.6kg K. 19.2				K. 9.60

打ち切り（2月10日）から、春作苗の定植（2月20日）まで僅か10日間の日数しかなく、その間に表のように、全量元肥を主体に全層施肥して何ら障害もなく、長期間肥効が持続することです。

定植の際、育苗センターからの苗運搬では、寒風に当てないようビニールや、こもをかけるようにし、植付直後は、燻炭苗は株元が乾燥しがちですので、灌水は株元を重点にするなど細かい注意をはらっています。

栽植本数は3.3平方メートル当たり3.5本～4本、2子づる仕立て、つる数は7～8本です。

定植後の管理 摘心、整枝、温度管理、病虫害防除等、組合の栽培指針に従い入念な管理によって、目標収量の達成につとめます。

特にこの産地は、数年前から菌核病の多発が大きな生産障害になっていましたが、44年秋作からスクレックスの散布効果が確認され、この悩みはかなり解消されました。

規模拡大に結びつく集・選果場

選果場完成までは、農家が等級毎に選別区分するので、毎日夜なべ作業になり大きな負担でしたが、現在では収かくしたものをそのまま搬入すれば、機械選果されるので、大きな労力軽減になり、安心して規模拡大ができるようになりました。

搬入後は一切、農協で責任をもって当ります。

能率良く選果され3本ずつポリ袋に密封包装（シュリンク包装）されて、ダンボール箱（主に10kg詰）に詰めて出荷され、毎日等級毎に売上代金はプール計算され、系統を通じて農協個人口座に振込まれるシステムになっています。

安値時は加工で勝負

生鮮食品の悲しさ、需要とのバランスがくずれれば値下りは必定です。こんな時の用意に、この産地は加工施設をもっています。

市場出荷して採算割れとなれば、管理に手の届かなくなるのは人情です。やがて値を持ち直したときには、ハウス内のきゅうりが「ガラガラ」では間に合いません。安値になれば加工向けとし、それが毎日数千円から、規模の大きい農家では万円単位になるということであれば、そんな時でも管理に張合ができるというものです。

何より良い点は、現在の作型では秋作の収かく

農業朝日賞に輝やく蒜山(ひるぜん)大根

岡山県八束村の大根と燐硝安加里

河 見 泰 成

あまりゾツとしない夜の山中ドライブ

岡山市から旭川の清流に沿って、直線距離にしてタッブリ80km北上すると、ちょうど岡山県を横断したことになり、右手に3つ頭をならべた蒜山(ひるぜん)、左に3つの大きな沢がなだれ込んでいる大山(だいせん)の南壁を見ながら日本海へ下りると、鳥取県の米子市が近い

このあたりは、ちょうど阿蘇を小型にしたような牧歌調のただよう蒜山高原と呼ばれ、スキー場、観光地として知られてもいるが、八束村(やつかむら)を中心として、いわゆる蒜山大根が広く栽培されている。とくに先年、海拔400m~500mのこの高原環境を生かし、合理的かつ前進的な農業経営を行っているという点で、八束村農協が農業朝日賞受賞の榮に輝いてから、蒜山大根の名声はめっきり上昇し、最近では各県からの訪問者が少なくないとのことだ。この大根の生産に、チッソ旭肥料(株)の燐硝安加里が、10数年来「緑の下の力持ち役」を勤めているというのは愉快だ。そこで昨年(昭和45年)の12月14日の朝現地を訪問するため西下した。

八束村の記録によると、昭和41年の50cmが最低で、30~42年の13年間の年間積雪量はほとんど100cm以上、38年のときは260cmの積雪量を記録した豪雪地帯である。

「来られるなら11月中でないとあかん。でないと積雪が消える春まで待たんならんで…。」と云っていた大阪の営業所から「来い」というからには、現地の状況もそう心配することはないのだろう。筆者の気持ちにこたえるかのように、当日は抜けるように晴れ上がり、暖い日ざしに恵まれたことは幸いだった。

午後5時近く岡山駅前で先着の大阪営業所の吉野、平田さん、そこえ所用のため来岡中だった八束村農協の丸山秋夫さんとともに後藤(敦)さんらも見え、後藤さんが運転する自動車ですり抜け、一路北を目ざして中国山地へと入った。

山にかかるると、かげったところに残りの雪がチラつく。「やっぱりあるな?。」とっていると、吉野さんが「これから現地まで直行すると、タッブリ4時間はかかる。運転は手馴れた後藤君だけだ、夜道に無理は禁物。とくに山の中ではね…。そして、それにあなたも東京から長時間、さぞお疲れのことだろうから、今夜は途中



大根で埋まった現圃(八束村)

で旅塵を洗い流そうという趣向はいかがですか?。」と声をかけた。まるで筆者の胸中を見すかしたような話である

事実、もうすっかり暗くなって、旭川ダムの水面も見えず、せまい山道を疾走してくる対向車のヘッドライトが見えると、小心者の筆者はその都度、何となく気構えるような感じになる。それに明るいうちに見えていた、あの如何にも脆(もろ)そうな肌をみせながら、のしかかっている懸涯の土を考えると、いい気持ちではない。

こういうやりとりがあって、夜の勝山盆地を抜けて、あと現地にもう一息という湯原(ゆばら)温泉の或る一隅に旅装を解くことができてホッとした。

8年間に、ビックリするほど伸びた蒜山だいこん

さて、われわれが湯原温泉で大休止をとっている間を利用して、最近の大根事情に触れてみよう。

大根は、最近の食生活の変化に必ずしも対応できずに、全般的に需要は低下し、これが次第に生産の停滞をもたらしているようである。去る43年産の全国収穫量は309万5,000トンで、10年前の34年にくらべ1.3倍となっているが、45年度の農業観測によると、44年産は逆に作付面積の減少を反映して、前年より5%減の295万1,000トンとなっている。

大根の生産県としての岡山は、愛知、千葉、新潟、福島、鹿児島諸県のように、必ずしも主産県とは云い難い。しかし、京阪神市場とくに大阪市場への入荷状況についてみると事情はだいふ変ってくる。すなわち次のとおりである。(昭和43年 作物統計から)

「42年の入荷量は、32年に比べ60%近い増加を示して



蒜 山 高 原 に て

おり、出荷産果数も増加している。32年当時は、和歌山が入荷量の約半分を受けもっていたが、42年になると、和歌山の占有率が20%近くにまで下った反面、徳島、岐阜、岡山等からの入荷量が著しく増加している。とくに、32年には6月から10月にかけての入荷量が少なかったが、42年には、この入荷薄の時期を岐阜と岡山でカバーしている。また、1月から4月にかけての早春ものの徳島、および9月から12月にかけての秋冬ものの石川の台頭も著しい。

丸山さんも語っておられたが、京阪神市場を中心に展開される岡山とそのライバルである岐阜、更にその後を追う石川県との間に展開される掛引きは、相当激しいものがあるようだ。

それでは630戸930世帯の八束村の「蒜山大根」はどんなカーブを描いているか、次の数字を見て戴けば判るように、物凄く伸び、これでは農業朝日賞を受賞し、見学者が連日のように見えるのも無理なかならうというものだ。

年次	面積 ha	出荷 (トン)	売上 (千円)	農家支払額 円
38	75	2,607	54,912	35,997
45	322	7,816	370,729	282,298

8年の間に、栽培面積が4.3倍、出荷数量が3倍、売上が6.75倍、農家支払額が7.8倍に膨れあがっている。しかもこれは、農協の手を経たものだけで、このほかに5、6、の任意組合の手を経て集、出荷されているので、実出荷数量は恐らく10,000トンを越すかも知れない。これで八束村の大根栽培の実情がお判りになったと思う。

油断ができないライバル、後進県の動向も不気味

標高はそんなに高い山合いではないと云っても、この山向うはもう直ぐ日本海だという湯原温泉の朝はさすがにきびしく、8朝時半出発だというのに、エンジンが冷えきって云うことをきいて呉れない。仕方がないので、車内に入ったまた暖をとり、9時頃になってようやく

現地へ向う。旭川沿いを100mほど逆戻りして左折、裏の急坂の先方に見えるトンネルを抜け、一気に登りつめる。蒜山の3つの頭や、大山の凄く南壁が、あっちに見え、こっちに見えていたが、やがて、思わず「ホー」と声を出したくなるような高原へ出た。心配した雪は、蒜山や大山に多少残っている程度。そしてまた、今日もなんとという良い天気だ!

大根は既に収穫を終ったあとで、圃場には何も見当たらない。時どき牧舎やサイロが見え、乳牛がエサを喰べているの見えるだけ。まことに、ここ蒜山高原は、ヴェルレーヌの詩?のように「世はすべて事も無い。ようであった。

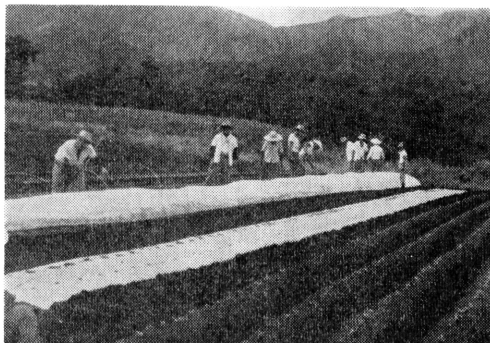
「さあお入り下され、丸山さんにうながされて、八束村農協指導課にお邪魔する。

「わしがここへ来たの?32年のことですか。終戦当時は海軍の予科練の1人として土浦におりましたなあ、もう少しで死ぬとこじゃったが、どうやら助って、それから新規まき直しでここへ来ましたわな。その頃のこの大根は、任意組合による集、出荷が主でしたね、農協扱いいうたら、3町歩ぐらいでしたらか?」

「いちばんのネックは輸送の問題ですが、昭和29年頃にはその問題もどうやら解決しておったようで、これからは相当出荷してもええ云うメドがついたらしいですわ。現在では、東は京阪神を越えて中京市場まで、西は福岡市場まで出荷しとります。ええ、もちろん、東京へも41、2年頃サンプル出荷を致しました。冷凍車で今日出荷しますと明後日の朝のセリにかかる。出荷時の状態も良かったので、市場でも好評でしたが、あまり無理はしとうありません。」

といかにも慎重だ。

「品質の点ではどの生産県にも負けんつもりじゃが、なかなか熱心な旧産地や新規に作付けを計画する県もあって、うっかりしとれんのですわ。まあ当のライバルいうたら岐阜県ですかなあ、それに長野県の動向も危険じゃし、近いところでは鳥取県の進出も見逃す訳に行かんの



だ い こ ん の 寒 冷 紗 裁 培

ですわ…。

情報網が発展してただけに、産地間競争は、昔に見られなかった激甚さが加わる。

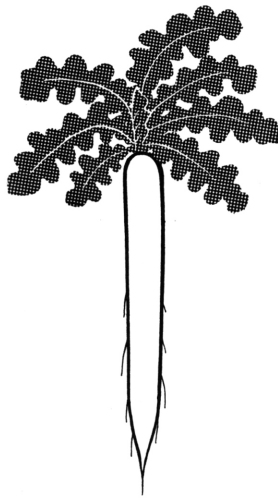
蒜山だいこんと磷硝安加里の馴れそめは？

＊蒜山大根と磷硝安加りのなれ染め？アハ…、それは格別他意はないのでして、実は、この辺のような黒ボク地帯に向く硝酸系の肥料が欲しいと思つておりましたがなあ、ちょうど、いまチッソ旭の本社におられる畑中さんが、(ええその頃は大阪におられましたがお見えになりましてなあ、いろいろと細かいお話がありましてなあ、そういうことならこの肥料を使おうかということになったんですわ。)

＊この栽培型としては①透明ポルマルチ=トンネル栽培(4月20日～5月15日播種)②初夏穫栽培(5月16日～5月25日播種)③夏穫栽培(5月26日～7月25日)④初秋穫栽培(7月26日～8月5日播種)⑤寒冷紗栽培(7月10日～8月5日播種)で、品種は①と②は長交春みの、③は長交夏みの1号または2号、④は長交夏みの1号、⑤は長交夏みの1号または2号を使います。種子は、なんだかんだ云うてきよりますが、ずうっとタキイ種苗にきめております。市場での信用を傷つけとうないのね。

生産を指導する立場として、これは当然のことであろう。

これらの作型にともなうって、当然施肥設計もちがいが、



完熟した蒜ぜんだいこん

(1) 春まき

肥料名	総量元肥		成分量		
	(kg)	(kg)	N.	P.	K
珪酸苦土石灰	150				
F. T. E	4				
磷硝安加里1号	100	15.0	15.0	12.0	
BM熔燐	10		2.0		
塩化加里	5				3.0
計		15.0	17.0	15.0	

(2) 梅雨まき

肥料名	総量元肥		成分量		
	(kg)	(kg)	N.	P.	K
珪酸苦土石灰	150				
硫加燐安特19号	80	9.6	12.0	8.8	

磷硝安加里1号	30	4.5	4.5	3.6
塩化加里	5			3.0
計		14.1	16.5	15.4

(3) 盛夏まき

肥料名	元肥		追肥			成分量		
	(kg)	(kg)	N.	P.	K	(kg)	(kg)	(kg)
珪酸苦土石灰	150							
磷硝安加里604号	100		16.0	10.0	14.0			
BM熔燐	50					10.0		
尿素入りNK化成		20kg	2.8					
計			18.8	20.0	17.6			

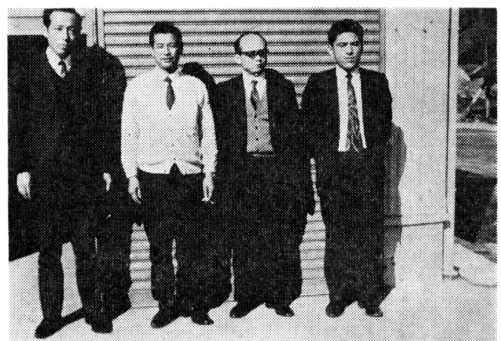
として指導しているが、実際にはどうも窒素過剰の傾向が見えるそう。

＊この頃では堆肥の投下不足からか、モミ殻をそのまま畑に入れる農家が増えております。ハッキリした結果は判りませんが、農家はええ云うとりますなあ。たしかに土壌は膨軟にはなるうが、1, 2年は腐敗せんので、どんなものでしょうか。とに角、このあたりのように黒ボク地帯の大根栽培には1作当り N15kg, P17~20kg, K10~17kgぐらいがええとこじゃと思つてますが、岐阜県ではNで20kgやとりますなあ。

大根の生産合理化……どうもあの足が邪魔で…。

指導課内での話は一応打ちきって、再び自動車で近くの集、選果場へ。16頁写真は選果機の一部を撮つたものだが、この機械について丸山さんは

＊大根の栽培の合理化或は機械化の可能性はどうかとなると、なかなかむずかしいですわなあ。何せ、1区画が小さいのでねえ…。この機械にしてからが、ミカンやリンゴ、或はタマネギなどちごうて、にゅうって足を出しとりますでしょう。丸い小さいものなら選果機も楽に設計できましようが、葉も裁断せにゃならん、長い足を持つとるので、ご覧のように吊環に1本1本かけてやらにゃならんのでね、これの設計には随分と考えさせられたもんですわ。それでも、わしのとこと、もう1カ所、とも角、大根の大型選果機を備えたところは、日本で二



集・選果場前で(左から後藤・丸山・吉野・平田さん)

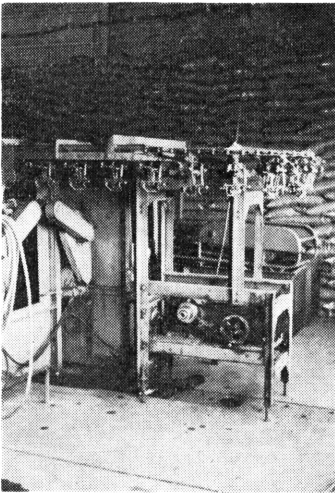
軒しかありませんとのこと。。

足踏み式の洗濯機や、手で何本か揃えて適当な長サに葉を截っていたのでは、とても間に合わないというのだが、さりとして作業はできる限り合理化しなければならぬが、肝甚の大根の『白い足』が、ともすると合理化のネックになるというのは、いささか皮肉めいている。

隣の川上村農協へ立寄ったあと、更に自動車を走らせて『蒜山高原レストハウス』に到着する。太陽はすでに正午に近く。空の蒼さに映える大山と蒜山の姿は一段と美しい。

川上村の指導課長佐山さんにもおいで願って、昼食をとりながら、いろいろ話を伺ったが、われわれが質問した米の生産調整について丸山さんは、次のように語った。

『米の生産調整…、米の需給という点から云うたら、確かに全般としては過剰ですわなあ。けど、八東村の立場ということになると、これはまた別なことになるのですわ。実は今夏(45年)こんなことがありました。米生産原である本県の南部、とくに岡山市を中心に配給米が不足して大騒ぎになったことがありました。その原因は、備前米はその品質の点から非常に市場人気



日本に2台しかないというだいのこの大型選果機

がええのです。その結果、県南部の米は殆んど自主流通米に流れてしまうという訳ですなあ。。

『もっとも、来年になって生産調整に関する線引き作業の結果、どんな地図が作成されるか、対策はそれから

ということになりましようが、わしらとしては、それほど神経質には考えておらんのですよ。さっきも申し上げたように県南における米事情もあるので、美作の米が応援せにゃあかんよになると思います。それに、八東村の産米の単位当り取量は県第2位、県下でも有力な平たん部という訳です。(43年10 a 500kg, 44年490kg, 45年510kg)岡山県は元来、米では生産県ですよ、これを、まさか輸入県にするようなことはせんと思いますがあ、それにしても、今後は乾田直播方式を考える必要があるかも判りません…。』

米の生産調整を転機として、わが国の農業は大きく揺れ動いているようだが、ときによっては300cmも雪が降ることがあるというこの蒜山高原に、米、大根、或いは酪農さては天与の清水を利用して鱒や鯉の養殖など、経営の多角化、合理化を推進している生産団地がある。大根だけで年間最低150万円から200万円、酪農を兼業している人達はまず400万円は固いらしい。しかし、それも指導する立場にある丸山さんのような人達の骨折りがなければ、なかなか実現はむずかしいというものだ。

食事を終って外へ出る。陽はいよいよ高く、そしてますます暖かい。こののどかな別天地にいと、筆者は東京へ帰るのが、つくづく嫌になった。

年がかわったと思ったら、もう
あ と が き

2月、それもすぐ過ぎてしま
うでしょう。いよいよ、46年度の米の生産調整の都
道府県別割当数量がきまりました。これからの農
政がどのように展開して行くか、大変興味がある
ところです。

皆さんのご活躍をお祈り致します。